

一 京都哲学会公開講演会記事

恒例の京都哲学会公開講演会は、平成十四年十一月三日(日)午後一時半から、京都大学文学部新館第三講義室において、左記のごとく行われた。

一、宗教は私的な事柄であるか

京都大学教授 氣多 雅子

一、相剋する立場のあひだに、理解は果たして

またどこまで可能か

京都大学名誉教授 酒井 修

講演会は数多くの会員の方々の出席を得て盛会であった。また講演会終了後、京大会館において懇親会をもち、多数の会員が講演者と共に討論と歓談のセッションの一時を過ごした。

二 外国人学者来訪講演会記事

平成十四年七月より、平成十四年十二月末までに、京都大学大学院文学研究科の旧哲学系諸研究室の主催のもとに行われた、外国人学者による講演会は次の通りである。

コンラート・レンガー(バイエルン州立絵画収集機構副館長)

「ルーベンスによる構想の変更と描き直し」

平成十四年十月二十五日 於京都大学文学部第二演習室

ハンス・マルティン・パールト(マールブルク大学教授)

「ルターと親鸞——世俗化をめぐる」

平成十四年十月三十一日 於京都大学文学部第二講義室  
マックス・コルハート(マクアリー大学教授)

「実験認知心理学に対する認知神経心理学の貢献」

平成十四年十一月十八日 於京都大学文学部第三講義室

ルートヴィヒ・フーバー(ウィーン大学助教授)

「ミヤマオウム——鳥類における社会的知性の一モデル」

平成十四年十二月五日 於京都大学文学部第四講義室

鄭 根植(全南大学教授)

「韓国におけるハンセン病問題について——植民地支配期の隔離政策を中心として」

平成十四年十二月十四日 於京都大学文学部社会学共同

研究室

三 京都大学文学部(哲学系)卒業論文題目

——平成十四年三月——

哲 学

山倉 裕介 『メルローポンティ「知覚の現象学」の身体論』

大西 琢朗 『論理哲学論考』における存在論と言語論の関係について

松倉 寿 『ニーチェのキリスト教的道徳批判』

西洋哲学史

柿本 正浩 『ソクラテスの死——弁明』を中心に——

平川 志朗 『発生的現象学の萌芽——「Idean」における「地平」を手がかりとして——』

日本哲学史

厚見真祐子 デカルトと西田

斉藤 万丈 高山岩男と宮崎市定の関係および世界史学史におけるその位置づけ

倫理学

相澤 伸依 ジョン・ロックの所有権論

貧川 聡子 プライバシーと報道の自由

北口 景子 ウィトゲンシュタインの倫理概念―『論理哲学論考』を中心に―

志津 吉明 『純粹理性批判』におけるカテゴリーの演繹について

樋口 未来 男女の労働状況の違いにみるジェンダー差別の正当性

河原 広明 体罰について

山田 大輔 メディアにおける表現の自由の例外について

宗教学

枳殻 智哉 キルケゴールにおける責任

橋詰 圭一 ガブリエル・マルセルにおける反省について

山川 公生 ハンナ・アレント『人間の条件』における生と死について

佐野 元直 真宗系思想批判

西井 教雄 ニーチェー〈超人〉思想へ至る道―

福島 健司 レヴィナスの思想における自我と他者について

渡部 寛 村上龍の作品論

美学美術史学

小野 彰子 『雁金屋衣裳図案帳』および『御ひいなかた』の文字文様について

服部香穂里 映画における死の表現と死生観

速水めぐみ 松園芸術に見られる外的影響

堀田 あや ポール・デルヴォーの絵画とジェンダー

松田 直子 歌川国芳について

渡辺 香織 風景画家ターナーの人物描写について

木下 藍乃 視覚と聴覚の融合をめぐる諸現象について

杉山はるか ベルト・モリゾーその作品に見る世界観についての考察―

谷崎 由依 *Totie Luig Boreg* 理想郷としての混在郷

東海 岳史 義太夫節の音楽性について

長島 昌代 ベンヤミンと芸術について

羽佐田由香 ジョージ・ガーシュウィンとアメリカンジャズ音楽

橋本 裕介 儲からない現代演劇―審美眼について―

永野 朋子 大島弓子の作品世界における考察

春山 連 ドイツ・ロマン派リートの構造―音楽と言語をめぐる―

古市 北斗 日本漫画の諸相

森山 一行 音楽聴の際に働く形式を巡って

谷 在野 グレン・グールドの演奏行為における発声について

―メルロ・ポンティの身体論を手掛かりに―

中国哲学史

岸 純子 劉向『列女伝』における「婦人の義」  
西村 健 嵯康における理想の生―「養生論」を中心に―

仏教学

桐山 大幹 Bhavanakramam III 研究

心理学

浅井 沙織 フサオマキザルにおける道具の機能的特性の理解  
浅水 優子 スケールモデル課題における幼児のシンボル理解に  
ついて―二重表象モデルの観点から―

戒井美千代 視覚のおよび空間的ワーキングメモリの分離可能性  
大塚 結喜 ワーキングメモリにおける情報干渉メカニズムの検

討

垣原 洋介 閥下刺激における情動反応と認知反応

加藤 卓史 視覚的イメージの形成における入力情報の影響

神本 美紀 ラットの聴覚条件づけにおける扁桃体の神経活動

小谷 貴由 乳幼児によるロボットの社会性の評価

佐々木 優 情報の短期的保持と海馬の神経活動

田中 佳子 感情、印象および出来事の頻度が自伝的記憶に及ぼす影響

服部 裕子 フサオマキザルにおける協力行動に見られる意図理解について

花原 宏子 幼児における対象物の動き方を手がかりにしたカテ

ゴリ化

廣瀬 信之 受動的に処理される事象の時空間的特性が心理的時

間に及ぼす影響

守田 麻子 笑顔による年齢判断―バイオロジカルモーションを

用いた検討―

山本 貴弘 日本語の読みにおけるサッカード制御

浅岡 裕 無意識的記憶テストにおけるデータ駆動型処理と概

念駆動型処理の検討

柴田 一馬 選択的注意における視覚と聴覚の相互作用

横山 貴彦 精神テンポに基づいた時間評価について

社会学

井上 千春 労働者と組織

大岸 真哉 就職活動

岡本 文子 現代社会とダイエット

香川 文 開発におけるジェンダー問題の社会学的考察

北内 直人 働き方の多様化に関する社会学的考察

木下 敬介 盛り場木屋町における祝祭性の解体

小林 史典 現代日本社会におけるコミュニケーション

高柳 康 インターネット空間における社会学的考察

玉川 達也 個人間レベルにおける権力関係についての一考察

躰井 泰之 芸術の条件

西村 一裕 日本人論に関する比較社会学的考察

前寺 康剛 華族の社会学的考察

山内 一輝 地域社会とスポーツの関係についての社会学的考察

トリブス・カーリー・ゲイ 観光をめぐる社会学的考察―日本におけるニュージ

阿部 淳 「ランドへのまなざしとその構築」  
宗教教団の形成と発展の過程についての社会学的考  
察

池尻 悦士 深夜の公園における社会関係の一考察

開出 卓之 メディアと記号環境

川瀬 英範 トルコの近代化の社会学的考察

後藤 庸介 テレビとスポーツ

齋藤ひとみ 美術館の社会学

島澤 明子 社会変動と教育政策

福岡 由理 少女マンガの社会学的考察

松本 英明 現代の職業意識

丸山 里美 ボランティアから新しい社会運動へ

和久井祥平 「援助交際」におけるマス・メディアの効果

藤田 晃久 紛争と暴力に関する社会学的考察—ボスニアにお  
ける暴力とは何か—

科学哲学科学史

川合 大 GNUとOSIを中心としたフリーソフトウェア運  
動

谷尻 和宣 テオフラストスによる植物の「性」

吉田 量久 ドーキンスにおける表現型の延長

桂田 佳明 イタリア・ルネサンスの機械文化

中沢 真吾 理化学研究所の設立背景

神田 周 インターネットの歴史

四 京都大学大学院文学研究科（哲学系）博士前期（修  
士）課程修了論文題目—平成十四年三月—

哲学

大伴 慎吾 ウイトゲンシュタインの規則論

安本 英奈 オースティンにおける言うことと行うこと

梁川 敬子 ウイトゲンシュタインの私的言語論

児玉 斗 ニーチェにおける遊戯の思想

中川 啓司 カント哲学における「純粹直観」について

三原 就平 ロックの哲学における観念説の役割

天野 謙治 中期ウイトゲンシュタイン研究

西洋哲学史

石川 浩司 ニーチェにおける永遠回帰思想について

日本哲学史

宮野真生子 偶然性の意義

倫理学

島内 明文 アダム・スミスにおける道徳判断の性質

宗教学

川口 茂雄 リクール『意志の哲学』における過誤と自由の問題

竹内 綱史 中期ニーチェの課題

キリスト教学

岩城 聡 バウル・ティリッヒの社会思想の一断面—宗教社会主義論の展開と課題—

津田 謙治 テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』における創造の問題

美学美術史学

大和田直樹 『運命論者ジャックとその主人』について—ミハイ

門田今日子 ヴィクトリア時代におけるゴシック・リヴァイヴァルの展開

西林 孝浩 武周期敦煌莫高窟の研究

吉田 朋子 フラゴナールと絵画ジャンルの問題

梅田 智彦 分離派脱退後のクリムトの風景画について

中国哲学史

孫 宝山 黄宗羲の政治思想

劉 文峰 隋唐の仏教々団と世俗政治

仏教学

上野 康弘 Shīramatī の註釈書研究—「刹那滅」の解釈を中心に—

白石 竜彦 Rānakṛti 著『殺那滅論』(Kṣanabhaṅgasiddhi) 研究

三宅 徹誠 『慧印三昧経』の研究

心理学

牛谷 智一 断片化された視覚情報の統合に関する比較認知論的研究

冬木 晶 心的表象操作の比較認知研究

村井千寿子 霊長類幼児における初期カテゴリ化の実験的研究

社会学

大島 良太 修養道德団体の宗教社会学的研究

谷口 俊一 戦時期日本における社会意識

吉井 雅人 小説の可能性—ピンチョン『競売ナンバー49の叫び』について—

Rajkai Zombor

家族に関わる現実認識と理想像の社会学的研究

鍵本 優 オーディエンス論の可能性

戸梶 民夫 〈外見〉差別のアイデンティティ・ポリティクスに関する社会学的考察

島岡 哉 近代日本農山村の映画体験に関する文化社会学的研究

科学哲学科学史

金田 明子 意味論的真理とその病理性について

小菅 雅行 量子力学の多世界解釈

五 京都大学大学院文学研究科(哲学系) 博士後期課

程学修者氏名——平成十四年三月——

哲学 有働尚紀 久木田水生 三谷尚澄

西洋哲学史 大草輝政 和田利博 小林剛 小川貴史

長田蔵人

日本哲学史 宮野美子

倫理学 奥田太郎 児玉聡

宗教学 三邊マリ子 都路恵子 鶴真一

キリスト教学 小倉和一 大石祐一

美学美術史学 傳江 白適銘 鮎川真由美 松原知生

中国哲学史 東川祥丈

心理学 森下正修 尾関宏文 近藤洋史 小杉大輔

松本淳子

社会学 石原俊 倉島哲 近森高明

カール・カッセゴール 鍋倉聰

科学哲学科学史 井上和子

前号目次

西田哲学における行為的自己とフランス哲学

における自我と他者……………山形頼洋

動物の心を探る……………藤田和生

——見えないものの認識を通して——

水とワイン……………川添信介

——スコラ哲学者の〈哲学〉——

身体から魂へ……………瀬口昌久

——プラトン『ティマイオス』における

知覚理論と身心問題——

次号論文予告

宗教は私的な事柄であるか……………氣多雅子

さいは投げられたのか……………出口康夫

——確率論の応用の批判的検討——

意味論的真理とその病理性……………金田明子

デリダとレヴィナスにおける

言語の問題……………関根小織